

第3期第13回生涯学習センター運営協議会 議事要旨

〔日 時〕2017年9月20日（水）14:00～16:00

〔場 所〕生涯学習センター 視聴覚室

〔出席者〕※敬称略

委員：岩本 陽児、太田 まゆみ、白崎 好邦、島田 忠次、陶山 慎治
中里 静江、柳沼 恵一
以上 7名

事務局：板橋センター長、加藤担当課長、小林管理係長、松田事業係長、高木担当係長、
中野担当係長、齊藤主任（記録）

〔欠席者〕上村 まり、大野 浩子、辰巳 厚子、中村 香、前田 美幸
以上5名

〔傍聴人〕1人

〔資 料〕

- ・上半期事業報告資料（資料1～資料4）
- ・委員の意見（当日資料）
- ・町田市生涯学習審議会（8月18日（金）開催） 委員メモ
- ・東京都公民館連絡協議会の活動について（7月～9月開催） 委員メモ

議題

1. 2017年度上半期の事業報告について

会 長：今回は2017年度の上半期の事業について、各担当から報告をしてもらうので、皆様のご意見を頂きたい。従来までの個別の評価・分析を行っていた報告書を改め、全体の事業について、大きな枠組みで見えていただく。

事務局：公民館事業について。

- ・まちチャレ・・・従来の市民企画講座を改良したもの。地域課題の解決や地域開催に重点を置き、公平性を保つため職員による選考を改め、第三者機関を設けて5講座を選考した。
- ・平和祈念事業・・・毎年開催している。今年は7月31日から8月6日の7日間と、講演会を含め8日間開催した。家族連れでの集客が見込めるコンサートやランプシェード等を前半に行ってPRしたことで、参加者数は昨年を214人上回る1163人であった。アニメや映画の上映会、紙芝居、お話し会、被爆体験等を行った。イベント数が多いので、職員の配置や、ボランティアの確保が難しい。
- ・家庭教育支援事業・・・家庭教育支援の担い手づくりは、国も力を入れている分野で、事業の財源の2/3を東京都からの補助金で賄っている。家庭教育支援学級はゼミ形式で、音や手作りをテーマにした2年制。「くるくるロケット」は、学級を終えた人がひろばを設け、講座を企画してもらうもの。「親と子の学びの広場」は当日自由参加。親子で遊ぶ活動を行っている。各保育園で行っている「子育てひろば」との事業の関係性が課題。
- ・障がい者青年学級事業・・・1974年から「生きる力・働く力の獲得」を目指して3学級171人と60人弱のボランティアが参加されている。公民館学級1名、土曜学級2名の新生が入った。8月26日（土）には土曜学級の20周年を祝う式典とイベントを実施した。この事業の課題は特に若い担当者の不足。学級生と対等に関わり共に学び活動することが出来る年代の学生さんは、就職活動などを背景に参加が少ない。
- ・その他・・・和光大学との共催講座「デザインと私達の生活」は、定員以上の申込みがあり、10代から50代と幅広い参加があった。鶴川地区協議会共催講座「地域レポーター養成講座」は

鶴川地区協議会で行っている「鶴レポ」を通し地域課題をあぶり出すシステムの活用について学ぶ。コンサート事業は、他事業のお知らせも出来て有効であった。秋からホールの工事があるので、今年度はあと1回程度の予定である。

○委員からの意見と回答

- ・以前の事業毎の評価シートは、現在も活用しているのか。この資料は運営協議会用ということか。
→今までの評価シートは、事業の振り返りを行うために、職員間では使用している。今回の事業報告資料は運営協議会用である。
- ・役割と機能を議論しているところで、個々の事業も同じような視点で評価していく必要があるのではないか。客観的な評価基準をどう作るかは難しいと思うが、個々の事業をきちんと評価していかないと、全体の議論に結びつかないと思われる。今回は評価という観点ではなく、事後報告という意味で良いか。
→おっしゃる通り。個々の事業の評価を行なうのではなく、今後の議論の参考にしていただきたいという趣旨のものである。
- ・企画した職員の感想ではなく、受講した人の声を我々は知りたい。今後の事業を話し合う上で必要である。
→アンケート結果資料は膨大にある。年度末の報告に工夫出来れば良いと思う。しかしながら、今まで5回等に分けて行っていた評価を1回で行おうとしているところで、この事業報告は、個々の事業評価を行うのではなく、生涯学習センターの役割と機能を議論する上で改めて事業の全体像をつかんでいただくというところに主眼を置いたことをご理解いただきたい。
- ・評価は実際に足を運ぶのが一番良い。
- ・もう少し詳しいことが知りたい場合は、個別の評価シートを見せていただくということで良い。
- ・公民館の事業評価方法は東京都公民館連絡協議会でも課題になっており、各市持ち寄って検討する予定であるので、町田市の方法も問われることとなる。
- ・公民館事業に関しては、役割と機能の中で地域との関係性について改善されていると思う。その一つがまちチャレ。鶴川地区協議会の中でも、試みがなされている。全体の傾向としては、我々の目指したい方向に近づいてきている。

○事務局からの説明

◎市民大学（資料2-1～2）

- ・多摩丘陵の自然入門・・・通年講座で第6回を終えたところ。定員を超える応募がある。ご夫婦以外にも親子での申込みもあり、合せて8組の参加があった。
- ・環境講座まちだdeエコツアー・・・前期はボランティア体験を通して環境について学ぶ。高齢者が多いので12回から8回に減らし、草刈や川掃除以外に田植えや緑地保全のための竹の伐採、竹を使った柵作りなどの体験を取り入れたことで、出席率の低さが大幅に改善した。エコ活動を続けたいという人も目標の8割を超えた。引き続き若い世代の参加は課題である。
- ・町田の歴史I・・・テーマ史から通史に戻した。多摩丘陵の自然入門講座と同様に、町田を知りたいという人に人気がある。講座理解度や市域への愛着向上、継続学習を希望の3点の効果指標は、いずれも86%以上となった。毎回通史を続けると、マンネリ化してしまうことが課題。
- ・まちだ市民国際学・・・定員を増やした。受講者の役半分以上がリピーター。最新情報が得られるので、今後の日本の進路を考えるきっかけとなったという感想をいただいている。学習継続を96%以上が希望している。最新の話題と講師陣をそろえることが課題
- ・人間関係学講座・・・プログラム委員の4名のうち半分以上が交代して、これまでと違う講師の方をお呼びした。延べ受講生の数は増え出席率も上がった。講義修了後のグループ討議も減らした。「学んだことを今後も生かしたい」、「社会問題に対して考えを深めることが出来た」という目標に対しては8割に到達しなかった。後半の講座も、興味関心のある講座を取りそろえたが、昨年度ほどではないものの、回を追うごとに参加者が減少したことは残念であった。
- ・“こころ”と“からだ”の健康学・・・全7回。関心が高く、応募がいつも多い。椅子の出し入れを自分でしてもらったり、講師の方をお願いしてグループワークを取り入れたところ、お互いに気

遣いが見られたり、交流会が良かったという意見をいただいた。講座終了後の交流会については、2名しか参加者がおらず、講座に組み込む等検討が必要。

・まちだの福祉・・・入門編。地域福祉の基本を学ぶ。定員には満たなかったが、ガイドヘルパーとともに参加した視覚障がい者の方など幅広い人の参加があった。障がいを理解し、地域で生きる。厳しい福祉の状況について理解ができて、高齢社会の中でどう生きるかを考えるきっかけになった。

・陶芸入門と電動ロクロ・・・両方とも定員には満たなかった。アンケートでは自身の作品に対する感想として、満足度「普通」が多い。自由筆記では「とても満足した」という感想が多い。

○質問・意見

委員：素晴らしい講師が多く、講座内容はとても良く、大変参考になった。最終回に行く交流会には疑問を感じる。出席者は半分くらいだったような。中身も学生さんが司会で「幸せ」について議論したが、短い中でそこまで議論が進まないと思う。出席回数に含めてしまうと、出席率がガクンと落ちるだろう。

事務局：一昨年までは出席率に含めておらず、出席者も少なかったが、出席者のアンケートの中で、「受講者は高齢者が多いので学生の意見も聞いてみたい」という意見があった。そこで桜美林大学の先生の協力を得て、学生の参加を促したところ、質疑応答で学生達から発言が出ることにより、一般の受講者も積極的になり、最終回でのグループの話合いも活発な雰囲気になったので、多少の改善にはなっている。

委員：評価をするには自分達で見ればよいかと思う、人間関係学講座や国際学の公開講座、歴史講座等、福祉は日中の開催なので、参加が難しかったが、出席可能な講座には出来る限り参加した。最後の交流会は目的がよくわからない。サークルを作ることが目的なのか。修了生の団体の紹介が目的なら、ブースを設けるのも良いと思うが、それもない。サークル化が目的にしては漠然としている。講座に組み込んでも出席率が落ちる。

事務局：自主的な学習の継続が目的の一つなので、学習の継続をしたいという希望があれば、サークル化等の支援をしている。

委員：既存のサークルの紹介とか、何かきっかけがないと、冊子を配られただけでは、自分で最初の一步を踏み出すのは難しいと思う。聞いているのは楽しいが、「地域に還元する」という意識はない。また、受講者は高齢化しており、開校式を見ている年齢層は上がっている。65歳くらいまではしっかり働くので、それ以降の年代の人達。若者に来てもらいたいのであれば、若者向けの講座は別に作る必要がある。

委員：若者は、昼間は都心に出て、大学等でいくらでも学んでいるので、若者を取り込む必要性はあるのだろうか。町田市があえて用意をする必要性はあるだろうか。どうしても、この土地に住んでいて、地域に対する意識があってくる人（高齢者）が対象になってしまうだろう。

委員：市民大学が何を指すかだと思う。若者を取り込むのか、どういう風に地域に返せるのか。

事務局：「次」への仕組みをどう考えるか。「次」までお世話するプログラムをつくるのか、自立できる仕組みをつくるのか、例えば「2年制」を作った時にどれだけ受講者が残るのか。

委員：市民大学が「地域に還元」という目的であった。

会長：市民大学のコンセプトは「あなたを励まし地域を育てる」だが、本当にそれが機能しているかが、以前からの課題。最終回のあり方については、学習の継続性を促すのか、地域を育てるまで発展させるのか、その辺のコンセプトが共通の認識になっていないと感じられる。プログラム委員が最終回のあり方について、どのように関わっているのか、という問題もある。若者を取り込む場合は開催時間も考える必要がある。平日の午前中は無理である。自然と環境は土日開催しているが、それ以外は、平日の夜間では、仕事帰りに来られるかどうか。

委員：「町田の歴史」の講座開始時間は、何故6時15分なのか。参加してみると、やはり年配の方が地域を楽しんでいる印象である。

事務局：リタイアした人は地域を見直すというところから、参加する方が多い。中学生で学校帰り走って参加しに来ている歴史好きの少年もいるが。

事務局：以前は6時30分からだったが、2時間と15分の交流会のために、開始時刻を少し前倒しした。遅くなると、今度はバスの時間を気にして帰られてしまう方もいる。

会長：次に、陶芸について、陶芸を修了した理由と、2019年度の方向性についてお聞きしたい。
事務局：事業報告の場ではあるが、質問が出たのでお答えしたい。陶芸スタジオは引き続き所管しているので、生涯学習センターの事業を行う。これまでの市民大学のような回数は行えないが、陶磁器に力を入れている町田市立博物館や、縄文土器等の遺跡について扱っている文化財振興課と協力して開催したいと考えている。

委員：陶芸スタジオの窯はまだ使えるか。

事務局：2つの窯のうち、大きい方の窯が経年劣化していて修繕が出来ないと言われている状況なので、講座は10キロの小さい方の窯で行う予定である。受講者が年々減っているのも陶芸講座の修了の理由の一つ。

○事務局からの説明

◎ことぶき大学（資料3）

・文学コース・・・国民的作家の司馬遼太郎をテーマにした。演劇出身の講師で、熱のこもった朗読で好評を得ている。司馬遼太郎作品そのものについて語るというよりも、他の作家との比較で浮き彫りにするという企画で、「期待と違った」という声もあり、企画意図が十分に伝わらなかった面がある。

・歴史コース・・・大河ドラマに毎回沿ったテーマだったが、今回は「城」に着目した。館鼻先生に全国的な話と、あと半分は、地方史研究会の八王子市の高校の先生であった。スライドを使わない講座で「写真がないと分かりにくい」と不評であったが、アンケート結果から、全体として大変好評であった。

・美術コース・・・ここ3年間西洋美術を取り上げていたが、秋に大きな国宝展もあり、「国宝」という言葉が生まれて120周年という節目ということで今回は日本美術を取り上げた。1回平均136人と、出席率が高かった。熱心でパワフルな講師で、とても丁寧なお話で、ご用意頂いた資料も最後まで終わらず、講座数があと2回程多ければ、というご意見もいただいた。

・鉄道旅行コース・・・家に閉じこもりがちになる高齢者に、少しでも外に出て活動的生活を送って欲しいという意図で企画した、前期で唯一の新規コース。申込み倍率は他のコースに比較して少なかったが、参加者からは「時刻表の読み方が分かった」、「鉄道の旅がしたくなった」という感想が寄せられ、活動的生活への良いきっかけになったと思う。「旅行のサークル活動に参加してみたい」という回答は35%で、目標の50%には満たなかった。

・健康コース・・・懐かしい音楽に合わせて体を動かすことで、リンパの流れを良くして、柔軟性や筋力を向上させることを目的とした、毎年恒例の人気講座である。申込み倍率は、ことぶき大学で一番高い2.86倍。受講後の評価も高く、「認知症予防について学び、健康の増進に役立った」という回答は95%で、講師のトークもユニークで、「講座自体も楽しかった」という声が多く寄せられた。サークル活動の問い合わせも多く、昨年度立ち上がった修了生サークルへ今年度7名が加入した。腰椎を骨折した受講者がいることが後で判明し、受講者のレベルに合わせた配慮が課題である。

○質問・意見

委員：鉄道コースに参加したが、趣味の世界だと思った。時刻表を使ってグループごとに旅行の計画を立てる実習は楽しかったが、せっかくなのでそのままそのグループで旅行に行くということにしたら、もっと楽しかったかもしれない。

委員：ことぶき大学の対象は60歳以上であるが、実際の参加者の年代は。

事務局：ことぶき大学に限らず、全体を通じて70代が多い。

委員：社会一般の「高齢者」の年齢が上がっている。ことぶき大学は自分達が楽しいとことが目的であるから。

会長：ことぶき大学のコンセプトは「楽しく学んで豊かに生きる」となっているが、これは10年前のコンセプトで、今は仲間を作って生きがいを作ることが目的だと個人的には考える。今の60歳は以前の60歳とはだいぶ違い、ライフスタイルも変わってきている。

委員：今や高齢者の定義は75歳。民生児童委員の定年も75歳に上げようという考えがある。65歳で定年退職した人もその後の75歳までの10年間、なんらかの形で地域での役割を探す講座

とした方がよい。それが行政がらみで学ぶという視点である。ただ面白く楽しく、ということではなく、期待される方が嬉しいという方も多い。

委員：「70歳から対象」とかでも良い。いつまでも65歳にこだわるのは時代遅れ。

委員：世代間の交流を議論する中で、高齢者だけのコミュニティを考えるのは時代とズレているだろう。先日、高齢者と高校生と肢体不自由児が一つのチームと一緒にポッチャを体験するというイベントを行ったが、お互いに影響し合える良い効果が現れた。これからは混ざり合わせる、「共生」が大切。70代にターゲットをあわせると、やりやすいが、本来の目的からはズレていくだろう。町内会の見守り活動や、振り込め詐欺なども地域の課題。今その議論をしている訳ではないことは重々承知の上で、誰がこの市民大学のプログラムを見直すかをやはり考える必要がある。町田は日本中で一番振り込め詐欺の被害額が大きい。その話題を市役所に持っていくとどこの部署がやるか、まとまりがつかなくなるが、生涯学習センターは横断的に学び合える唯一の組織ではないか。

委員：一度それぞれの大学の垣根を外し、見直す時期に来ていると思う。

会長：特にことぶき大学は見直すタイミングにあると思う。

○事務局からの説明

◎生涯学習推進事業（資料4）

- ・学習情報の収集・発信・・・さがまち学生クラブと一緒に動画を作成し動画サイトに載せた。「子育てサイト」というのが始まったので、今後家庭教育の情報を載せていく。情報の事業についてはどの分野を収集発信するかが課題になる。

- ・学習相談・・・まだまだ、職員の力量に左右され、受けた相談が次の相談に活用されていない。学習相談能力の向上や窓口職員体制のあり方の検討が必要である。

- ・社会教育関係事業講師派遣制度・・・町田市内で行われる講演会等に対して、講師謝礼を支援するという、昭和57年からある非常に古い事業。金銭のみの支援で補助金的意味合いが強い。ボランティアバンクやまちチャレのように、金銭のみの支援ではなく効果的に地域支援が行えるものを考えていかなければならない。

- ・生涯学習ボランティアバンク・・・100件程の個人や団体に登録していただいているが、活動の件数が年間30件程度と低い。下半期から始まる3水スマイルラウンジや健康フェア等、今までの生涯学習センター企画から、地域のイベントに入り込んでいってボランティアバンクをPRする方法に切り替えていきたい。自治会や子供会や老人会からの声掛けがあり、少しずつ地域に浸透していている感触がある。

- ・連携組織・・・連携組織として現在大きく分けて2つある。一つは、庁内の横断的に行っている、生涯学習連絡会「お悩み解決LABO」。連携事業を行っている庁内の職員を呼んで、横串に刺すような形で連絡会を行っている。8月には学生との連携をテーマに市民協働推進課と協働で庁内連絡会を開き、連携実績のある職員を招いて、パネルディスカッションを行い、どういう成果や苦労があったのかを話し合った。もう一つは、さがまちコンソーシアム。これまで生涯学習センターを会場に開催してきた「さがまちカレッジ」を地域でも開催していく。5月にはなるせ駅前市民センターで町田・デザイン専門学校の講座が開催。11月・12月には、子どもセンター「ただON」や「ぱお」で開催予定である。もう一点、さがまちコンソーシアムでは、地域と学生が交流する事業として、市の産業観光課と相原の地元の団体と「相原魅力発見コンテスト」を行った。女子美術大学が優勝し、2位は法政大学のサークルであった。11月3日には相原の中央公園にて昨年度に提案したイベントを実際に行い、継続的なイベントを目指す。

- ・生涯学習センターの施設利用率は16年度の平均利用率は78%で15年度とほとんど同じ。利用者数は3000人減少しており、大きな部屋の利用率が減り、小さい部屋の利用率が上がっている。理由は一つの団体の構成人数が少なくなっているのだと考えられる。サークル化がなかなかできないという話も出る中で、大きな人数で団体を構成することが難しくなっていると思われる。4月から個人利用も開始しているが、団体が小ぶりになっている点については検証が必要。

- ・学校開放・・・市内の4校の特別教室を貸出している。この4校は独立の開放区画を持っている。平均利用率は5.5%。予約は1か月前から直接施設に出向いて申請するということや、学校の予定を

最優先としていることなど、利用しにくい部分がある。

○質問・意見

会 長：これらの事業は、地域の組織をつなぐ、市民に愛されるコンシェルジュ、という観点から、あるべき姿の具体的施策においても期待されている分野である。

生涯学習センターの利用者数が減少しているということだが、それは部屋を借りた実数だけをカウントしているのか、各種講座も入っているのか。

事務局：市民大学等の講座も入っている。フリースペースについてのカウントはしていない。フリースペースの利用者は感触として増えている。

会 長：フリースペースの利用者数を把握する良い方法がないだろうか。

委 員：高校生がゲームをしたり、試験になると勉強をしている。短時間座りたい人が座れない。空いている部屋を学習するような場所として開放してあげてもよいのではないか。図書館と違って和気あいあいとできる場を作ると良い。学習支援の出来る人がいても良いと思う。子ども達は常連が多く、来ている子達に「開放スペースがあれば使いたいか」と聞いてみたところ、「あれば利用したい」と答えた。

会 長：藤沢の市民活動推進センターでは、テーブルの真ん中にカードと鉛筆があり、記入すれば利用できる。あまり手間暇かけずに利用者の数や活動内容が把握できると思うので検討していただきたい。

委 員：その日の空いているスペースを前もって調べる仕組みが出来ると良い。放課後の居場所づくりとしても大切である。

委 員：将来的にも大人になった時、公民館という場があるということを知ってもらえることが出来る。

事務局：ふらっと来られる場所を作るというのは、検討の余地があると思う。また、学習支援については、子ども家庭支援センターで一人親家庭の学習支援事業というのが始まっており、生涯学習センターを使って週一回、夜に行っている。これらも絡めて、施設の有効活用を考えていきたい。

委 員：学校開放について、学校側の都合とは何か。「1年間通して、第〇曜日」といった予約できるか。

事務局：まずは学校側の予定が優先。現地に行って予約をしなくてはいけないので、利用の面で不便な点もある。定期の貸出しはしていないが、結果的に、空いているので毎週利用しているというサークルはある。平日は夜間、土日は日中も利用できる。シルバー人材センターの管理人は利用率を見込んで予算組みして配置している。調理実習室やパソコン室もあくまで会議室の用途としてのみの利用に限定され、調理やパソコンの使用ができるわけではない。

委 員：大学等でも同じ話があり、せっかくあるコンピューター室を開放しようとしても、ライセンス契約の関係で、コンピューターは一般には貸し出せない。工夫が出来ると良いが。

議題

2. 報告事項

(1) 町田市生涯学習審議会の議論について（レジュメ（2））

会 長：次に時間の関係で、先に生涯学習審議会の議論についてご報告いただく。

委 員：8月18日の生涯学習審議会の内容について、私の作成したメモをお配りしたので、それを参考に報告いたしたい。公共施設の見直しについて、目下検討中で、80年代に建設された施設の老朽化と人口の減少による減収に重点化して対応していく必要がある。そのためにまず①アンケート調査を行うという報告があった。約3,000名に調査用紙を送り、市民の声を聞いて、方向性についてのご理解を得る。アンケートについての意見が相次ぎ、都合のよい設問では、アンケートそのものが信頼されないといった話が出た。地域への愛着、特色あるまちづくりについて、これからの学びのスタイルとして、「課題解決を皆で考える」ということの議論がされた。先ほど市民大学とことぶき大学の話が出たが、従来の、それらによって「皆さんが主体的になりなさい」ということとも、また違うかもしれない。

私の発言部分について触れたい。日本の社会教育・生涯学習は、憲法・教育基本法・社会教育

法・図書館法等で、市民の学習権が保障されている。それを責任をもって担うのが自治体であり、教育委員会である。先ほども学習支援を行っているという話が出ていたが、学びの機会から漏れこぼれた人に対する学びの機会の保障について皆さんに考えていただきたいという発言をした。今に至る戦後の日本社会教育を主に担ってきた人達というのは都市の比較的裕福な中間層。戦後はその分厚い中間層によって特徴づけられ、その中で初めて家事労働から解放され、新しい余暇時間から「学び」というジャンルを手に入れた主婦という担い手が創出されたのが50年から40年前。25年前から90年代初頭になると二極化社会になり、かつての中間層は希薄化してきている。図書館が書庫にどんなに素晴らしい蔵書をもっていても（町田の図書館は資料費も減り来館者も減っているが）それだけではなく、網の目からこぼれた人々へ学習権保障を行うことを重点的に考えることは将来の納税者を増やすことにつながっていく。ご要望を言っていただければ、お伝えしていくので、お願いします。

会長：人財育成について人材の財を材木の「材」から財産の「財」に変えたとあるが、第3期はどうか。

委員：第2期については統一見解であったが、第3期については、強制はしない。

会長：「まちカフェ」と「生涯学習センターまつり」が比較されているが、「生涯学習センターまつり」の解体という話まで出ているようだが。

委員：このままではみんなまとめて淘汰されてしまうという危機感である。存在感をアピールしていくために、内輪だけではなく、外の人に来てもらうようなまつりの工夫が必要。

会長：まちカフェと比較して、生涯学習も地域への愛着と地域課題の解決を目指すのであれば、地域に開かれたまつりとなれば、という趣旨で良いか。

委員：その通りである。内向きで、サークルだけの楽しみとするだけでなく、商業ビルの中にあるのだから下の階の皆さんと協力する、などがあってもよい。

（2）センター長報告（レジュメ（1））

センター長：9月議会では公共施設の再編に関して、まちだ未来の会から請願が出た。施設再編計画については新たな価値の創出ということが言われているが、市民との意見交換等充分行い、地域で暮らす市民にとっての今後をしっかりと見極め、合意形成した上で、具体的な提示をしてほしいという趣旨である。政策経営部で請願を受けている。引き続き継続審議である。

（3）東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：第1回研修会が9月2日にあった。講師は、武蔵大学永田幸三先生。戦後の公民館活動について写真で追っていきながら、ビジュアルでわかりやすかった。活動運営主体は住民であるが、一方で館長や社会教育主事が積極的であった、というような内容等。

都公連の研究大会が来年2月3日（土）にあり、委員部会で検討した結果、課題別集会名は「公民館と地域の結びつきを考える」。福生市・昭島市・西東京市の3市が事例発表を行う。

議 題

3. その他

・日程について、次回は10月30日（月）午前10時～12時、次々回は年度内最終で、11月27日（月）休館日時間は午後2時～4時。